

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

大正八年 八代国治日記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター 公開日: 2025-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比企, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001489">https://doi.org/10.57529/0002001489</a>

# 大正八年 八代国治日記

## 比 企 貴 之

明治・大正期の日本中世史研究者である八代国治（一八七三〈明治六〉年〜一九二四〈大正十三〉年）が、東京大学史料編纂掛において南北朝時代史の編纂主任を務めていた大正八年一・二月分の日記である。この日記は國學院大學研究開発推進機構（校史・学術資産研究センター）で購入した「『八代国治資料』一式」のうちの一つで、同じくかれが國學院在学中の明治三十年に記した日記については前号（比企貴之「明治三十年 八代国治日記」〈『校史・学術資産研究』一五、二〇二三・三二〉）で翻刻と紹介をおこなった。資料群についてはそちらを参照されたい。

### 〔形態〕

縦二四・五糎、三三・五糎の「文科大学史料編纂掛」の用箋（二〇行分の罫線あり）全九枚に記されている。全紙に綴じ跡の穴があることから、元来は綴られていたと推察される。ただし、購入時点、すでに綴じ糸のないバラバラな状態であった。三月以降分は散逸した可能性も考えられよう。

### 〔内容〕

日記は大正八年一・二月分のわずかな分量しかないものの、三上参次、田中義成、山本信哉、和田英松、黑板勝美、

辻善之助ら、黎明期の本邦歴史学界を領導する史料編纂掛の碩学の名が登場する。三浦周行や中村直勝、さらには朝河貫一・穂積陳重らが同掛を訪ねたことなども記されており、史料編纂掛の日常を垣間見ることができるとも記されている。また、これ以前から八代は長慶天皇の即位問題にかんする考証に取り組む（のち『長慶天皇御即位の研究』に結実）一方、この年に宮内省から皇室御料沿革調査も委嘱される。一月十三日条にみえる「三上先生より兼ねて提出の皇室御領研究の件につき、昨夜、学士院委員会通過及び宮内省より補助に関する委細を懇に語らる。」との記載は、かかる補助金申請の進捗についてのものである。このうち八代は皇室領の研究に多くの業績をあげ、さらに没後の大正十三年六月には、『長慶天皇御即位の研究』により帝国学士院の恩賜賞を与えられる。

明治三十年六月に國學院を卒業すると、ただちに本務を史料編纂掛にえた八代であったが、その後も國學院との繋がりは強かったようで、明治三十二年には國學院卒業生の有志を募つて史学講究会という研究会を設けたらしい。これは毎月二回程度、各自の日ごろの研究の成果について発表と討論をおこなうものであった（『國學院雜誌』第六卷第六号（一九〇〇・六））。日記の一月十四日条には、同じく國學院卒業の先輩で山本信哉（第三期）と連れ立って、芳賀矢一の國學院大學学長就任式に出掛けるようすが記されている。ただし、『國學院雜誌』第二五卷第二号（一九一九・二）の彙報「皇典講究所・國學院大學記事」の「所長・学長就任式・学監告別式」には、「愈去月十二日午後一時半、本大学講堂に於て就任式を挙げたり」としており八代の日記と齟齬があるが、その事情は詳らかではない。

## 【凡例】

- ・ 翻刻は原本における用字に準じた。
- ・ 翻刻・校訂者による参考注（ ）および校訂注〔 〕を施した。
- ・ 人名注は当該人物の当該月初出にのみ付した。

## 大正八年一月

六日、新年初めて出勤。午后三時新年によりて早退す。

七日、

八日、<sup>(義成)</sup>田中部長病氣によりて去年末志那より帰朝。

静養の後、今日初めて出勤せらる。六編の室に参ら

れ、滞在中の挨拶<sup>(カ)</sup>を語らふ。御談半に京都三浦博士<sup>(周行)</sup>

来室す。兼ねて新年早々上京の報知ありしが、風病

にて遅れたる赴き談。<sup>(参次)</sup>田中部長と共に数時語り退く。

午后三時より三上主任室にて各主任と會して、志

那見学中の一節、特に寺社の古文書採集の様模<sup>(ママ)</sup>を語

らる。先づ京兆尹訪問より法源寺採訪以下委しく

一時間に及ぶ。結局、縁起以下我が國の古文書に當

るものは、いづれも金石に彫したるものを石櫃内に

収めて火災を防ぎ、所謂金櫃石室が是であることを

明にせられた。其他泰山以下名山大寺の古文書（石

碑）採集の方法及び国史家の是非共歴遊せざるへか

らざることを委曲に説明せらる。

九日、

十日、病氣欠勤。

十一日、病氣欠勤。

十三日、午后三時、三上先生より兼ねて提出の皇室御

領研究の件につき、昨夜、学士院委員会通過及びひ宮

内省より補助に関する委細を懇に語らる。

十四日、午后二時、山本君と共に國學院大學学長就任<sup>(信哉)</sup>

式に赴く。史料の玄関に於て京都中村直勝君に逢ふ。

十五日、

十六日、食堂にて関戸氏所蔵文書を見る。<sup>(西園寺)</sup>公衡自筆の

文書及び東大寺文書以下庄園に関する文書多し。

十七日、東寺文書として旧史料に挿入せし文書、百合

文書中より発見す。この文書にて幕府奉行御教書中奉書人の花押を宇都宮蓮智なることを明示す。

(二紙白紙)

廿九日、水、病氣後初めて出勤す。高野山より関東武家式目来着。応永廿五年奥書あるものを延徳四年に書写せしもの、<sup>(ママ)</sup>に係る、蓋し式目注釈書として最古のものなるべし、この書ハ去年夏高野山に調査に赴きし際、見出す所の上、先生と御相談の上借用す。

井村氏に式目落掌の返事礼状を差出す。

三十日、

三十一日、

二月

一日、

三日、大雪寒し、昨夜来せき烈<sup>(咳)</sup>しき為用心。遅く出勤す。

四日、鎌倉副島君来訪。実朝公七百年祭講演者のこと<sup>(知)</sup><sup>(座)</sup>

を相談す。三上先生の考の仰せて、和田英松氏に依す。午食を共にし二時帰らる。

五日、

六日、午前、良全可翁・宗然可翁に就て美術研究室に至り調査す。午后國華社田中豊藏氏来訪。可翁の事に就て疑を質問す。兼ねて午前奥田氏の好意によりて来り談する所なり。然し良全可翁・宗然可翁同なりや、異人なりやに就てハ要を得ず。結局、可翁に関する絵画の現存する目録を為して共に除く、研究すへきことを定めて帰らる。正午、東(遠藤)氏の古文書を閲覽す。

七日、奈良玉井榮次郎氏より西阿に関する新聞紙の切抜を送り来る。一見す。

十二日、東大寺文書中の聖守の消息、黒板博士より落手。<sup>(勝美)</sup>

兼ねて朝河氏より談ありし弘安四年異国征伐に関する文書。同博士に依頼致し望たるもの疑もなき立紙な文書にて、余が勘仲記の裏書より発見したる大和寺衆国民を召す文書と関連して、弘安四年八月鎌倉幕府が再び逆襲を企てた此挙を知ることが出来る。当時、我國民の意氣の<sup>(此カ)</sup>なることを併せて知られる。

十三日、京都帝国大学所蔵の悲田院の高札及び(三字アキ)

の飢饉救助に関する文書を見る。(善之助(英松))辻・和田両君は、

善光寺前立訴訟に関する證拠鑑定として地各裁判所(方カ)

に赴く。東大寺文書も各編纂官の閲覽に供す。(マア)

十五日、午后二時半、穂積博士の代理として植木(直一郎)

君関東武家式目を見に来る。康永二年式目を更に発

見せしことを語る。近日、穂積博士史料を持参すへ  
き赴語る。

十九日、午前十時半、穂積博士に面会。貞永式目のこ

とを語る。十一時半、三上先生(参次)の部屋にて穂積博士

持参の康永二年の奥書ある式目(卷子本)・天文八年舟橋

秀枝賢自筆の式目(卷子本)、及び享禄版式目を更に永

禄二年書写したる式目(巻脱)を拜見す。午后、辻編官(纂脱)

以下、各室の主任と共に博物館に赴き、聖徳太子の

法華経(以下空白)

廿六日、辻君の注意にて黑板博士の許に來りし旧観心  
寺所蔵(ママ)阿弥陀佛光背の銘を見る。銘左の

如し。

戊午年十二月為命過名。伊文沙古(カ)向其妻名汗麻、

尾古敬造弥陀佛像以。此功德願過往其夫。及以七

世父母生々世々恒生。浄土乃至法界衆生。悉同比

願畢。

大さ長五寸三分、巾四寸二分、表火煙の処唐草の毛

彫あり。次に光ハ丸き線にて表し、其の上に蓮花あ

り。奈良朝か平安朝初期のもの、如し、戊午は斉明

天皇四、元正天皇養老二、宝亀九、承和五に当る。

大正九年二月十六日(食堂にて)

引用書の例 華族等に数家ありし際には、姓の下に地

名を入れること、定む。左の如し。

毛利府長家所蔵文書(以下欠)